核兵器廃絶をめざす
富山医師・医学者の会

No. 62
会報

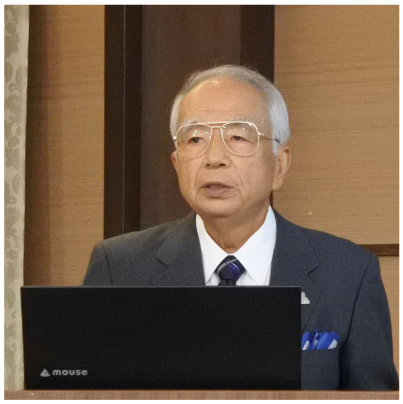
富山市桜橋通り 6-13
TEL　076-442-8000
世話人代表　金井 英子

「広島原爆の実相から観る 世界恒久平和への道」

ー 2023 年被爆者の講演のつどいー

会場を埋めた参加者（富山電気ビル 4 階 8 号室）

富山ゆかりの
飯田國彦さんを迎えて



9 月 23 日、当会は「2023 年被爆者の講演のつどい」を富山市・富山電気ビルで開催しました。これには県被爆者協議会、被爆二世・三世の会、県保険医協会が後援しています。司会を吉田徹世話人副代表が務め、金井英子世話人代表が主催者を代表して挨拶しました。会場参加者は 54 人、オンライン視聴は 18 件ありました。

3 歳で被爆、一緒だった母と姉をなくす

講演された飯田國彦さんは、高卒後三菱重工業に入り、転勤で富山へ。23 年間暮らし、2016 年に広島に戻って、語り部として広島を訪れる人たちに被爆体験を伝えています。

78 年前の 8 月 6 日朝、広島の母親の実家で被爆、一緒だった母と姉は 1 カ月後に亡くなりました。「なぜ僕だけが助かったのか。母や姉が食べ物を先にくれたからだろうか」と振り返ります。

それでも体中にささったガラスの傷がふさがるのに 7 年もかかり、大人になっても腸炎をくり返し脳腫瘍は二度も。「私の経験はまだまだ軽いほう。一瞬で骨まで灰になった人、水を求めて川に入った人、餓死した孤児たち。このような被爆者たちを今後は絶対に出してはならない」と声を震わせました。

核兵器廃絶が平和への唯一の道

今回の講演では「平和への道」として最近取り沙汰された核迎撃能力にもふれられました。「マッハ 10 を超える極音速ミサイルを撃ち落とすというのは技術的に困難。それも複数飛んで来たら対応できない。世界的な核兵器廃絶が平和への唯一の道だ。そのためには核兵器が使われるとどうなるか、原爆の恐ろしさ、実相を広めるしかない」と訴えました。

当日の講演の様子は、当会 HP のトップページから視聴できます。

http://toyama-hankakuishi.net

元世話人・瀧邦彦先生を偲ぶ

2 面より瀧先生の思い出、戦争体験などを紹介しています

元世話人・瀧邦彦先生を偲ぶ

本年 9 月 17 日、元世話人の瀧邦彦先生が 103 歳の生涯を終えられました。瀧先生は、1979 年の『核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会』設立時から世話人を引き受けられ、放射線の専門医として核兵器や原発の危険性について警鐘を鳴らしてこられました。

また瀧先生は太平洋戦争体験者であり、70 年以上の長きにわたって警察医として地域社会に貢献されました。

在りし日の瀧先生の文章を紹介し、哀悼の意を表します。

世話人会での瀧邦彦先生（2011.5.30）

「放射線の障害はある限界を超えると爆発的に出てくる」

2011.5.30　世話人座談会「福島第一原発事故とこれから」より

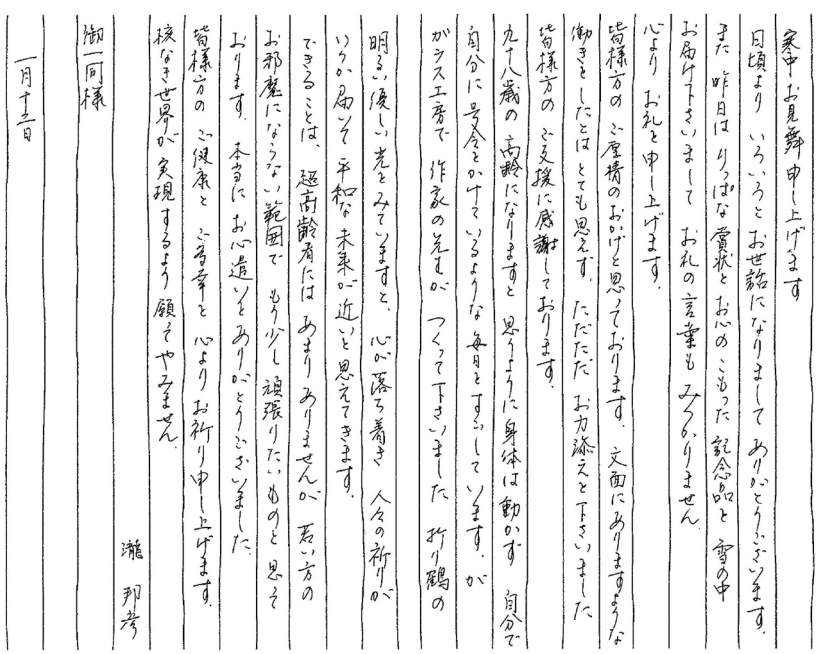
（瀧） 1919 年生まれなので 10 月で 92 歳。戦争中陸軍病院に勤務、30 ミリぐらいのちっぽけなレントゲンだったが、何の防具もなしに朝から晩まで写真を撮っていたらずいぶん被曝した。内地に帰ってからは大学病院で遠隔操作なしで放射線を扱ってきた。

その経験から言うと放射線による皮膚障害というのは、少しずつであっても長年浴びると、ある限界を超えると爆発的に障害が出てくる。私は幸いにしてがんの発症はなかったが白血球が急激に減少したり、顔の皮膚炎もやった。手などは最近まで冬になると出血していた。政府の今の対応では私と同じようなことが起こる。地元に帰りたい、と言う住民をどうするか難しいが、正確な線量の把握と毅然とした避難が大事だ。

瀧邦彦先生の思い出

富山県警察医会　会長　河上浩康

瀧邦彦先生は、戦後間もない頃から検死業務に従事され、平成になってからは富山県警察医会を立ち上げられました。その後、第 2 代会長に就任され、会長を辞められても警察医として検死に出向されました。103 才で亡くなられた令和 5 年の春にも、車いすに乗って検死にあたられたと聞いております。先生は検視現場にカメラを持参して死体の状況を記録されるなど、以前より「ご遺体に少しでも正しい死因名を付けてあげなくてはかわいそうだ」と検死業務に真摯な姿勢で臨まれていました。小生は 32 年余り警察医をやり、瀧会長の後を継いで第 3 代会長になっておりますが、先生の熱意には遥かに及ばず、今後は偉大な先輩を見習って精進していきたいと思っています。



寒中お見舞申し上げます

日頃より いろいろとお世話になりまして ありがとうございます。
また 昨日は りっぱな賞状と おしめこもった 記念品と 雪の中
お届けくださいまして おれの言葉もみつかりません。
心より お礼を申し上げます。
皆様方の ご厚情のおかげと思っております。文面にありますような
働きをしたとは とても思えず、ただただ お力添えを下さいました
皆様方の ご支援に感謝しております。
九十八歳の高齢になりますと 思うように身体は動かず 自分で
自分に苛立っているような 毎日をすごしております。が
ガラス工房で 作家の先生が つくって下さいました 折り鶴の
明るい後しい姿をみていますと、心が落ち着き 人々の祈りが
いつか届いて平和な未来が近いと思えてきます。
できることは、超高齢者には あまりありませんが 若い方の
お邪魔にならない範囲で もう少し頑張りたいものと思そ
います。本当にお心遣いをありがとうございました。
皆様方の ご健康と ご幸福を 心より お祈り申し上げます。
核なき世界が 実現するよう願ってやみません。

瀧 邦彦

御一同様

一月十二日

瀧先生は、2017 年秋に北日本新聞社の地域社会賞を受賞されました。同年 10 月の当会世話人会で、結成以来長く世話人を続けられたことに、感謝状と記念品を贈呈することになりました。

□述筆記されたお手紙からは、やさしい先生の心情が伝わってきます。

ガラスの折鶴を手に（大沢野の滝医院で）

敗戦者から見た改憲論議

世話人　瀧　邦彦

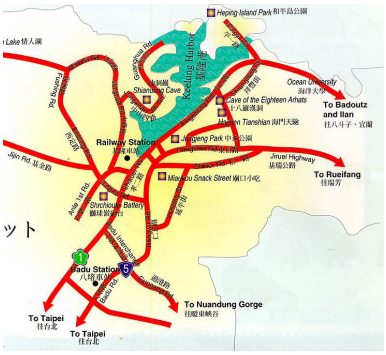
本稿は、2004 年 8 月に「『九条の会』に賛同する富山医師歯科医師の会」（略称：九条医師の会とやま）が発足したことを受けて、瀧先生が会報に寄稿されたものです。

「憲法九条」を変える変えないの議論が取沙汰される昨今、第二次世界大戦に参加し敗戦を体験した者の一人として感想を述べてみたい。

グラマンの機銃掃射を受ける

東京の連日の夜間空襲を経験し、昭和１９年にシンガポール（昭南）の南方軍総司令部に向け出発したのは１２月の豪雪の中、富山駅での単身出征だった。

翌年の正月、陸軍の病院船バイカル丸に乗船、門司港を出帆した。最初の寄港地は基隆（キールン）港であった。船の故障の為、余儀なく台北陸軍病院に一ヶ月臨時勤務することになった。ちょうど台湾沖海戦後の一ヵ月後であった。台北陸軍病院勤務中、米国グラマン戦闘機の空爆を受け、身近に機銃掃射を受けたが九死に一生を得た。又、基隆港では乗船が至近弾を受け爆風に吹き飛ばされ、胆を冷やしたこともあった。



火柱立つ港が波静かで穏やかに

敗戦後、台北大学の外科教授となった畏友許書剣君の招きで戦後再び台湾を訪れ、余暇を見て基隆港に足を運び、高台から基隆港を眺めた。戦時中とは全く異なり一隻の沈没船もなく、海中からマストをのぞかせている船も見当たらなかった。港内は波静かで、穏やかな海面に鴎までのどかに飛んでいた。

私が戦時中入港した時は港内に火炎を起こし、火柱を上げ燃え続け、時々爆弾の爆発音を聞きながら船中勤務に服したことが走馬灯の様に思い出された。グラマン機の操縦士が身をのりだして、日本の病院船の港外退避を促すアナウンスを聞いたのも３０年前のこととは思えなかった。

戦前は台湾も日本の領土であり、許君も日本人であった。金沢の美女と結婚したので、戦後奥様が台湾人に帰化することになったのである。学生時代の友情が今日まで続き、彼の日本訪問の折には必ず会って会食するのが老後の最大の喜びである。先年最愛の奥様をくも膜下出血で亡くされ、分骨が金沢に納骨されているので、墓参りに来る彼と会うのは「友あり遠方より来る又楽しからずや」の心境である。

無茶な戦争で日本が得たものは皆無

台湾は今も戦時体制で陸海空の三軍は国民の義務であり、戦時中の日本と変わらない緊張状態にある。徴兵制度も戦時中の日本を想起させるものがある。

憲法九条は敗戦の時、平和を主唱する日本人の衆知を集めて作られたものであり、武力を放棄する九条を同盟国米国の圧力によって変えると云うことはどうしても納得出来ない。無茶な戦争で日本が得したことは何一つない。領土を失い財産家屋を失い、最も大切な人間を失い、得たものは皆無であった。丸裸になった日本をもう一度想起してもらいたい。

ベトナムを侮ってベトナムに負けた米国

自国の防衛の為の軍隊は確かに必要だが、戦争をしかける軍隊又は参加する武力は必要ではない。「驕れる者も久しからず」米国もローマ帝国の如くソマリアの徹を踏まないと誰が保証出来るだろうか。徹を踏むと断言する学者や宗教家も沢山いる。

ベトナムを侮ってベトナムに負けた米国は苦い経験を忘れたのだろうか。窮鼠猫を咬むの仮令（たとえ）の如く、武力に劣るベトナムは阿片を使って米国将兵の麻薬中毒作戦に出た。その結果多くのアメリカ兵が阿片中毒で上官暴行、サボタージュの連発で戦争の継続に支障を来たし、第二次阿片戦争に陥ったことは余り知られていない。

ベトナムで実力行使しなかった日本

ベトナムでは日本軍が仏印に上陸した際、ドーソン沖合で日本海軍は艦艇を並べた。その時、空砲を放ったが実弾は放たなかったと云う。その後シンガポール攻略の足場として使った仏印には、進攻時銃弾を使用しなかった日本軍は敗戦迄実力行使をしなかったのである。米国のベトナム戦争とは全く対照的であった。

敗戦の昭和２０年８月１５日、日をおかず上陸して来たフランス海軍が海防（ハイフォン）港に上陸

し、再度仏印統治の野望にかられていたことは確かであったが、ベトナム人の民意が全て日本軍に傾いていたことを知った仏国政府は、いち早くこの野望を捨て全権を米軍に譲ったことは勝敗の明暗を分けたのである。

この時歴史は動いた。米国はロシア牽制の為どうしても仏印を手に入れておきたかったものと思われる。武力財力に弱いフランスは判断を間違わず、米国に全権をゆだねたことは誠に賢明であった。引くべき時は引くフランス人の永年の知恵は、日本人も学ぶべきである。

我々日本軍は在仏印中ベトナム兵を兵補として教育し、又一方ホーチミンの軍隊がベトナム共産党として呱呱の声をあげ、次第に強くなりつつあったことは確かであり、ホーチミンのベトナム共産党には日本軍はなるべく干渉しなかったのである。この共産党の強力な存在が戦後日本企業のベトナム進出をかなり遅らせた理由でもある。

岸壁で別れを惜しんだベトナム人

ベトナム女性の労働力が抜群であることは、ベトナムに在住した経験のある私達には衆知の事実である。昭和２１年３月、敗戦で帰国に際し海防の岸壁に安南人が列を作って笊籠を振り、リバテー船で帰国する日本兵を見送り別れを惜しんでくれた光景は、未だ私は忘れることは出来ない。

以前ベトナムの難民船が日本に向って出港し、東支那海を漂流したことがあるが、そのテレビ放送を見て安南人に一度くらい東京見物させてやりたいとの思いにかられたのは私一人であっただろうか。日本軍も永い期間随分とベトナムに迷惑をかけたであろうに。戦争に負けて帰国する日本兵を、岸壁にて温かく見送ってくれた現実を立場を変えて見る時、日本人の我々に出来ただろうかと反省することがある。この様なやさしい国民性に惚れこんで、将兵の中に現地逃亡して安南女性と一緒になった者も多数いたことはご存知だろうか。

何れにしても、戦時中ベトナム人に武力暴力を用いなかった日本軍が彼等の敵愾心を起させなかった理由と思われる。

暴に報いるに暴をもってせず

日本は今イラクに米国の同盟国として参加しているが、米軍がイラク人の殺戮を繰り返す以上、いくら日本がイラク人の援助と云う名目で活動しようが飴の効果はなく、鞭の米国が存在する以上無駄と思われる。

「柔よく剛を制す」。この哲学は何時の時代も人間の真理であると云うべきだろう。蒋介石は米国ルーズベルト大統領に強く働きかけ、日米開戦に持ち込み、日本を敗戦に追いこんだ。その彼が日本軍の敗戦に対し「暴に報いるに暴をもってせず」、負けた日本軍兵士を苛めるな、と中国の八路軍に布告したことは余りにも有名である。この格言を附記して憲法九条の平和保持の精神を守ろうではありませんか。

戦争をしかけない日本国をどうしても作りたい。若者を戦地に送らない、死なせない日本国を。どうしても兵を送りたいなら、ハイテクを知らない、出来ない私達老兵を招集したらどうだろう。小泉首相も自ら戦争の悲惨さを体験して下さい。世界の若者を殺さないでほしい。

当会ホームページから被爆体験者の講演動画を視聴できます

当サイトの「被爆体験を聞く会」からご覧ください

（2013.8.11 講演）

● **岸川義一さん**
● **柴田政一さん**
● **田島正雄さん**

・3 人は救援部隊として広島に入市被爆

岸川さん　柴田さん　田島さん

● **水野耕子さん**（2005.9.25 講演）

・14 歳、長崎で被爆
爆心地から 2.8km

● **飯田國彦さん**（2016.7.31 講演）

・3 歳、広島で被爆
爆心地から 900m